

# 「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査(2011年)」の全体概要・トピックス

豊田 尚吾 *Written by Shogo Toyota* 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員

## 今回の調査の特徴

エネルギー・文化研究所(以下、CEL)は、「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を2005年から継続して行っている。2011年も第7回目の調査を1~2月に実施した。得られたデータはCELの研究活動に様々な形で活用させてもらっている。

今回の調査は3月11日の東日本大震災の前に調査結果の回収が終了している。当然のことながら、震災を原因とした意識の変化があったとしても、それは調査結果には反映されていない。したがって、本誌における、それぞれの研究員による各分野のデータ分析で、震災の影響を実証的に取り扱うことはできない。震災が生活者の意識に与える影響に関しては、本誌別稿で論じている。その点、ご了解願いたい。

さて、本稿では今回の調査の前提となる、目的や方法などの調査設計を概説するとともに、調査全体から得られた傾向を論ずることを目的としている。各分野に関する、より詳細な分析は、本稿以降の各執筆者が個別に取り組んでいる。ただし、生活充足感、不安感、幸福度に関しては他の稿では取り上げていないため、本稿にて少し詳しく論ずる。

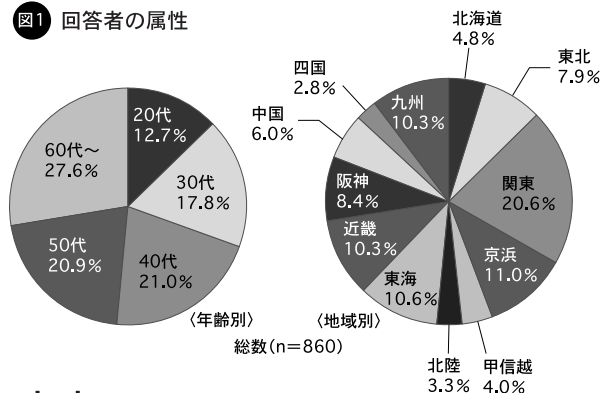
まず、本節では調査設計について述べる。「調査目的」は毎年同じであり、「住まい・生活に関して、生活者が抱える現在の問題、期待する姿・方向、そのギャップを埋める解決策、今後のあり方などを分析・研究するための基礎資料とすること」である。

次に「調査設計」を明らかにしておく。①調査地域：全国(日本国内) ②調査対象：満21歳~満75歳の男女 ③標本数：11,555人(昨年の回答者に継続して回答を依頼)のうち回収数8,600人 ④抽出法：層化2段無作為抽出法とエリアサンプリングの併用 ⑤調査方法：郵送法 ⑥調査期間：2011年1月20日~2月8日、である。※回答者属性は図1を参照。

従来、調査方法は「留置記入依頼法(調査員が直接調査対象のお宅を訪問し、調査を依頼する方法)」を採用していた。しかし、今回は諸般の事情により、調査依頼と調査票を郵送し、回答をお願いする、「郵送法」を用いた。この方法は第2回調査(2006年実施)以来、2回目の採用である。また、昨年、調査対象を増やしたので、今年は増やさず、昨年の回答者のみに調査を依頼した。

※郵送法は留置法などのような、訪問時の不在という無駄は避けられる一方で、返送率(回収率)が低い、回答負担を小さくする(回答しやすくする)ため、質問数を減らす必要があるなど、一長一短がある。

図1 回答者の属性



調査の度に述べているが、本調査の最大の特徴はパネル調査であることだ。第1回調査(2005年)での回答者1034人の回答者に継続して調査を依頼しつつ、回答いただけなくなった方の補充を第3回調査(2007年)、第6回(2010年)で行った。その結果、昨年の第6回調査では1182人の方々が回答してくださった。今年はその方々の中から連絡のとれた1155人に回答を依頼した。毎回回答をしてくださる方々にあらためて感謝し上げたい。

## 調査トピックス

本節では、今回の調査の結果に関する概要を報告する。今回の調査は、食生活、住まい生活、環境・省エネ配慮生活、企業の社会的責任(CSR)、生活充足感・幸福度の5つの分野に大きく分けることができる。既述の通り、生活充足感・幸福度以外は各論でそれぞれの研究員が論じているので本稿では大まかな結果のみを述べる。生活充足感・幸福度については②で論ずる。

### ① 食生活、住まい生活、環境・省エネ配慮生活、企業の社会的責任(CSR)

〈食生活〉の満足度は高い。「やや満足」も含めれば、全体の77・9%(男性77・5%、女性79・1%)が肯定的な回答をしている。しかし少し細かくみると、男性77・5%のうち、33・1%が「満足」、44・4%が「やや満足」であり、女性の24・4%が「満足」、54・7%が「やや満足」と異なっていることが分かる。やはり、調理頻度など、女性の方が食生活の様々な側面により深くコミットしている人が多いため、手放しで「満足」と表現しにくいのかもれない。

不満内容をたずねると、女性の方が男性よりも不満を持っている場合が多く(栄養のバランスや食の安全、安心など)、女性の1割以上(11・6%)が「料理がヘタ」なことに不満を感じている(男性は5%未満)。

〈住まい生活〉に関しては、居住地に対する満足度は高く、74・9%は肯定的な回答をしている。一方、住宅の満足度に関してはそれが58・9%に止まり、少し見劣りがする。住宅に関しては、この満足度を含め、希望する住まいや高齢期の住まい方などに関して、食生活で見られたような男女差はほとんど確認することはできなかった。

他方、年代別で見ると、ライフステージが異なっている。したがって、「後の安心のため」というような、世代の関心や認識が大きく影響することが明らかで、世代が異なっても差が出ない項目も多かった。住まいに関しては性別や年齢とは独立に、それぞれの基本的価値観というものが存在し、判断に大きな影響を与えているのかもれない。

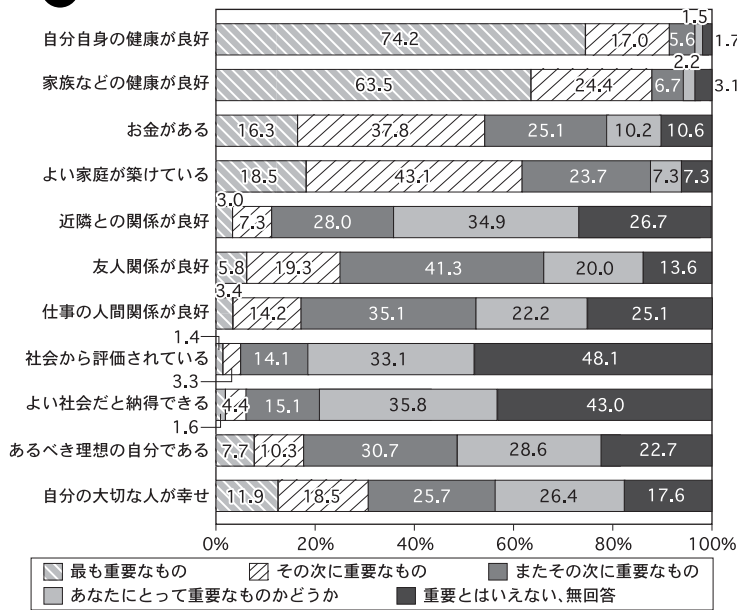
〈環境・省エネ配慮生活〉に対する、生活者の関心は高い。全体の68・1%は環境に配慮した生活を送っていると自己評価し、地産地消や省エネ性を重視した家電の選択など、環境・省エネに配慮した行動にも積極的に取り組んでいるとの回答が多かった。少なくとも意識面ではかなり定着しつつあるようだ。

ただ、実際にどの程度実行しているかについてはこの調査だけで確実なことはいえない。一般に、意識と実際の行動にはギャップがあり、特に自分の得にならない面倒なことに関してはその差が大きいことが分かっている。意識の定着がどれだけ実践につながっていくかを確認していく必要がある。

図2 生活充足感の分布(2010年から2011年への変化)

		2011年回答					不満	非常に不満	合計	%
		非常に満足	満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	どちらかといえば不満				
非常に満足	人数	2	6	6	0	0	1	0	15	1.8%
	%	13.3	40.0	40.0	0.0	0.0	6.7	0.0	100	
満足	人数	10	72	55	8	6	0	0	151	17.8%
	%	6.6	47.7	36.4	5.3	4.0	0.0	0.0	100	
どちらかといえば満足	人数	2	51	232	53	23	6	3	370	43.7%
	%	0.5	13.8	62.7	14.3	6.2	1.6	0.8	100	
どちらともいえない	人数	0	13	62	67	28	4	2	176	20.8%
	%	0.0	7.4	35.2	38.1	15.9	2.3	1.1	100	
どちらかといえば不満	人数	0	4	29	22	27	6	1	89	10.5%
	%	0.0	4.5	32.6	24.7	30.3	6.7	1.1	100	
不満	人数	0	1	5	5	7	7	2	27	3.2%
	%	0.0	3.7	18.5	18.5	25.9	25.9	7.4	100	
非常に不満	人数	0	1	1	1	1	6	9	19	2.2%
	%	0.0	5.3	5.3	5.3	5.3	31.6	47.4	100	
合計	人数	14	148	390	156	92	30	17	847	100.0%
	%	1.7	17.5	46.0	18.4	10.9	3.5	2.0	100	

図3 幸福を感じるために重要なもの



② 生活不安感、生活充足感・幸福度

「生活不安感」に関する設問で、「1年前と比べて大きく不安感が増した」との回答が多かったのは、「雇用の維持・就職の機会(全回答者の27・2%)」、「年金給付制度の健全性(27・1%)」、「収入・日々のやりくり(20・8%)」である。他の選択肢と比べても目立っており、やはり、お金に関わることへの不安感や関心が依然として高いことを示している。

一方、へ生活充足感を昨年の結果と比較してみると、「どちらかといえば満足」が全体の4%程度増え、「どちらともいえない」が同じく全体の4%程度減っている。逆にその他の選択肢(「非常に満足」など)はほとんど選択率に変

化がない。同様に現在幸せかどうかを聞いた設問でも、「どちらかといえば幸せ」が増え、「どちらともいえない」が減っているものの、人数的には全体の1%程度である。また「不幸せ」が若干減り「どちらかといえば不幸せ」が若干増えるなど、生活充足感とは微妙に異なった結果を示している。

そこで昨年と今年の「両方」に回答してくれた約847人に絞ってみると(図2)、生活充足感における満足度の増加が4%から2%強に減少した。幸せ度ではむしろ「幸せ」が1%程度減り、「どちらかといえば幸せ」が1%増、「どちらともいえない」が変化なしという結果となった。

つまり、昨年と今年の間回答者が異なっていることが前記の変化に大きく影響していると考えられる。実際には見た目ほどの変化はなかったようだ。とはいえ、震災前には少なくとも改善方向にあったことは認められる結果であった。また、生活充足感で51%、幸福度で44%の回答者が昨年と今年では異なる回答をしているので、見た目の安定度に比較して、個人の流動性は高いことは確認できる。

「幸福を支える理由」についても質問した。「自分自身の健康が良好」など、自身が幸福を感じるために重要であるものとして、11の選択肢を「最も重要なもの(2つまで)」「その次に重要なもの(2つまで)」「またその次に重要なもの(3つまで)」「あなたにとって重要なものかどうか(残った条件の中からいくつでも)」「重要とはいえない(残ったもの)」の5つに分類してもらった。

これは昨年に引き続き2回目の質問となる。結果は、昨年とほぼ同じになった(図3)。健康、家庭、お金の重視という優先度の順番は、かなり安定的なものであるといえそうだ。

この質問に引き続き、自由記述形式で「(前問の)選択肢以外であなたが幸福を感じるために重要なことがあれば、自由にご記入ください」という問いを設けた。キーワードになりそうな頻出語をいくつか抜き出すと、「時間(主に)」「自由」と対になって使われている、「家族(主に)」「幸せ」「や」「健康」など、肯定的な語とともに用いられている、「子ども(主に)」「成長」といった語とともに使われている、「趣味」といったものであった。

人の幸福度は多様であることは間違いないものの、多数の意見をまとめてみると何らかのパターンが見出せるようである。